

氏 名	占 部 史 人
学 位 の 種 類	博士（美術）
学 位 記 番 号	博美第6号
学位授与年月日	平成25年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当者
題 目	学位論文題目 『現代美術における「空性」の造形的表現』 — 存在への問いかけとしての彫刻作品 —
	研究作品題目 『空いろの島』 「浮寝の旅」「たこつぼとおんな」 「満月の夜に（輪舞）」「空いろの島」
論文審査委員	主 査 教 授 今 井 瑾 郎 副 査 准教授 中 敬 夫 副 査 教 授 土 屋 公 雄

## 1 学位論文の要旨

本論文の目的は、大乘仏教思想の根幹をなす「空性」という思想を抛り所として彫刻作品を制作し造形的に表現するための方法論を模索すると同時に、その表現における論理的な検証を言語によって把握しうる限り論考することにある。近・現代社会の倫理の根底に横たわっていると考えられている西洋近世の人間中心主義的な思想とは対極に位置する「空性」という思想コンセプトの核に据えた彫刻作品を現代美術の分野において発表することによって、限界を迎えつつある現代社会のあり方に反省を促すとともに、西洋美術の文脈において一方的に語られて続けてきた現代美術という分野において、新たな美学的価値の転換が期待できると考えている。

まず序章において、作者である私自身の存在を表現するために彫刻表現を模索し、思考する所から、自分自身の存在があらゆるものと地続きに繋がっているという世界観に辿り着き、その言葉を仏典にある「空性」という言葉に見いだしたということを簡略に述べ、本論考全体の構成について説明していく。

第1章においては「空性」の思想的な概略と、空性の造形的表現において生じる思考について論じる。第1節では作者と「空性」との出会いから「空性」の歴史的背景やその世界観について論じる。「空性」を語る上で重要となってくる「自然（じねん）」という言葉や、「有と無」、「時間」といった3つのキーワードによって「空性」の世界観と「空性」の造形的表現との接点について論じていく。第2節においては現代における「空性」という題目で現代社会において「空性」という思想がいかなる意義を持ちうるかということについて論考すると同時に、現代美術という分野において「空性」をコンセプトの背景に持った作品を発表することがいかなる意義を持ちうるかということについて、現代美術作家ヴォルフガング・ライプの言葉を引用しながら論考する。

第2章においては空性の造形的表現において、実際に彫刻作品を制作する際の方法論について、モチーフ、素材、旅、ドローイング、彫刻、空間という6つの項目に分けて、現代を代表する美術作家6人の作品や言葉を引用しながら論考していく。第1節の「モ

モチーフについて」においてはアニッシュ・カプーアと自作のモチーフにおける対比の中で、「空性」に対する作者の立脚点の違いについて論ずることによって、自作におけるモチーフの意匠性を浮かび上がらせる。第2節の素材における考察ではヴォルフガング・ライプの作品と、自作に使用する素材における類似点と相違点のなかに「空性」の造形的表現において使用する素材の選択について論考する。第3節「旅について」ではハミッシュ・フルトンの作品と自作との「旅」という行為における差異について述べ、作品制作におけるあらゆる要素に関連づける「旅」という行為について論考する。第4節では彫刻作品を制作する前の段階行うドローイングという行為について、拾い集めた素材を支持体としたドローイング作品と古紙に岩絵具で描くドローイング作品について論じる。ドローイングの考察においてアンセルム・キーファの作品を取り上げ、自作と対比させながら自身のドローイングが求めるべき境地を思索する。第5節では彫刻と身体との関係性について、シュテファン・バルケンホルの言葉を引用しながら、両者の作品について論じていく。最後に第6節では彫刻作品を展示する際の空間と場の関係性について、ジェームス・タレルの作品と比較しながら論考する。

第3章では、空性の造形的表現の実践として、空性という思想を拠り所として制作した個々の彫刻作品について論じていく。第1節では個々の彫刻作品について述べ、第2節においてはドローイング作品について詳述する。第3節ではワークショップ作品について論考し、最後に第4節において彫刻作品やドローイング作品を空間に配置して完成するインスタレーション作品について論ずる。

結論においては、「空性」という果てしなく深淵な思想を自身の造形的表現に反映させるという本稿における試みを通じて、3年間の研究期間において達成し得たことと、し得なかったことについて論述する。

彫刻作品を制作するという行為は、現実の空間や世界に直接的に関わることである。現実の空間に関わるということにおいては、否応無しにその行為の必然性を問われるとともに、制作者自身のあり方に省察や問題提起を迫ってくる。そのような自己を問うという態度は「空性」という思想が培われてきた仏教思想のあり方に呼応しているといえる。本論文においては、彫刻作品が向かうべき方向をささやかに指し示すような道標として「空性」という思想を位置づけ、今後制作を続けていく中で自身の作品におけるコンセプトの指針となるような本論考を進めている。

## 2 学位論文審査の要旨

日本の近現代美術のほとんどが西洋の文脈で捉えられているなかで、占部史人は自身が浄土真宗の僧侶という立場もあり、そのアイデンティティーとして大乘仏教の根幹をなす空性の思想から博士後期課程の研究テーマを『現代美術における「空性」の造形的表現』—存在への問いかけとしての彫刻作品をもとめて—としている。

研究論文の第一章は、空性思想の概念と造形的思考についての論考とし、2節の構造からなる。第1節では「空性の歴史的通時性」、「自然（じねん）の概念」、「有と無・時間」による3つのキーワードを論じている。第2節は「現代社会における空性」と「現代美術に宿る空性」としてヴォルフガング・ライプを引用しながらの論考である。

第2章においては、空性を造形として展開する方法としてモチーフ・素材・旅・ドローイング・彫刻・空間の6節を設け、引用した作家と自身との共通性と差異性をとおして「空性」に関して論じている。第1節は「モチーフ」と題してアニッシュ・カプーアを引用し、第2節ではヴォルフガング・ライプを引用する。第3節の「旅について」ではハミッシュ・フルトンの作品例を挙げ「旅または歩行」という行為に関して論考している。第4節はドローイングを取り上げアンセルム・キーファーを引用し、「ドローイング自体」を論じている。第5節では彫刻と身体の関係性としてシュテファン・バルケンホールを引用し、第6節では「空間と場」としてその関係性をジェームス・タレルの作品において論考している。

第3章においては「空性という思想による自作品」を4節にて構成している。第1節は「自身の彫刻作品」に関して論じ、第2節においては「ドローイング」を論じている。第3節では空性をテーマとした「ワークショップ」について論考し、最後の第4節では「インスタレーション作品」に触れている。

そして結論において彫刻行為自体を自己存在と空性との呼応性のなかで論じ、現代という彷徨する状況のなかに可能性としての道標として「空性の思想」の可能性を位置づけている。

主たる研究作品である作品のタイトルは『空いろの島』である。この作品はあいちトリエンナーレ地域展開事業の一環として愛知県が企画した展覧会において発表された。そして平成24年10月6日～12月9日まで愛知県三河湾の佐久島において展示された。展覧会は研究論文の第2章第6節で論じている「空間と場」の関係性を作品化した「浮寝の旅」「たこつぼとおんな」「満月の夜に（輪舞）」「空いろの島」の4点で構成され、博士後期課程の3年間の集大成として公開審査作品となった。

佐久島の港から始まった作品群は神社の境内へとつながり、家並みを通り過ぎながら坂の上の作品（「空いろの島」）までつづいていた。野外（自然）という空間における作品は、日常から遊離した無機質な展覧会場とは異なり、日常そのもののなかに存在し得なければならないことになる。論文（言語）とは異質な視覚・触覚というような触手ともいえるべき感性の多様な関係性が複雑に輻輳することになり、しかも時間・場という状況の総体ともいえるべき関係性を同時に背負う結果ともなる。作品はそのような難問を抱きながら島の日常と同化する部分と異化するものを演じていき、「空性」の世界観が佐久島の日常のなかに見事に語られていた。そしてその成果は社会的にも高い評価を得るとともに、県の芸術の地域展開事業の役割を十分に成就したことになる。その他アーツスペース AFA、アートコートフロンティア 2011（アートコートギャラリー）、ギャラリーサイド2における個展等々主な業績9編があり、現在全国的にも高く評価されつつある作家のひとりであることは確かである。

以上述べてきたとおり、占部史人の現代美術を空性（大乘仏教の根幹をなす思想）の思想から研究した例はあまりないといえる。美術の新たな萌芽がその国の民度と固有性という土壌から開花することを自明の理とするならば、占部史人のテーマは当然問わなければならない問題であったし、現代という状況と歴史的必然性のなかで大いなる

普遍性を帯びた命題といえる。占部史人の研究テーマの独創性を前提とした「論文」・「造形作品」は優れたものであり、博士の学位を与えるのに十分であると結論した。